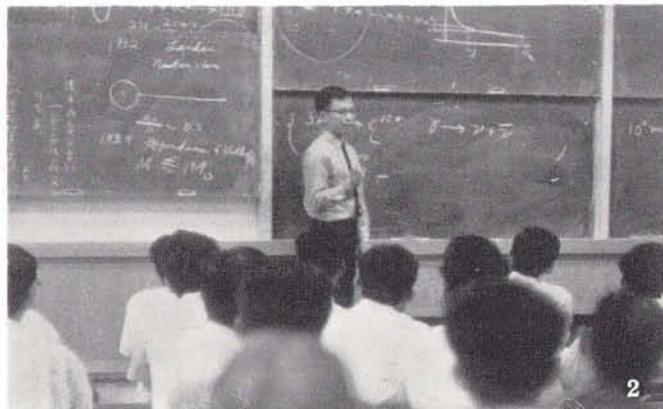


◇海外天文学者の来訪

コロンビア大学のチュー・ホン・イー氏（丘宏義）が夏休みで台湾へ帰省の途中、東京に数日滞在され、6月29日に東大物理学教室の談話会で講演された。チュー氏は台湾から渡米後コーネル大学で博士号をとられ、その後物理から天文学に転向された。講演は天文学でも最近開拓された分野、ニュートリノ天文学、ニュートロン星とX線天文学、ガンマ線天文学にわたり、説明は非常に明快であった。①はチュー氏の近影、②は講義中のチュー氏。



①



②

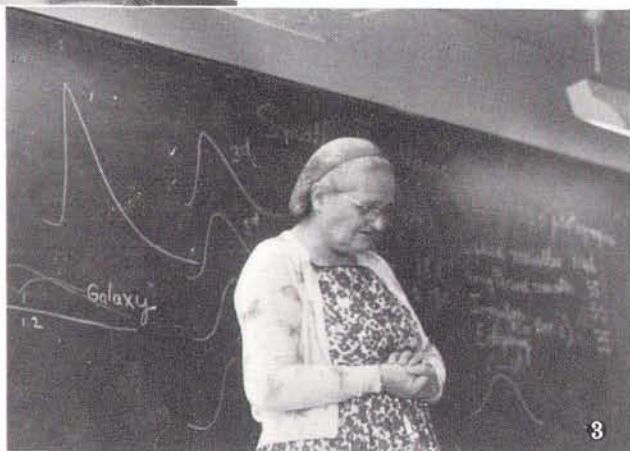
7月1日にはハーバード大学のガボシュキン夫妻が東大天文学教室を訪れ、ペイン・ガボシュキン夫人が小マゼラン雲の変光星について講演された。夫人のことはよれば“Always my husband works and I speak.”ということであるが、この研究も夫君のセルゲイ・ガボシュキンとの共同研究であり、御息達も手伝われたとかで、発表する論文にはガボシュキンという名前を四つ連ねるということであった。夫人の講演中セルゲイ氏は時折り説明に必要な図を夫人のために描き、又終始愛情のこもった目で講演する夫人を見つめていた。

この日の午後は夫妻は三鷹の東京天文台を来訪し、設備を見学した。

③は講演中のペイン・ガボシュキン夫人
④は御夫妻の近影。

（写真 ① ② ④ は成相恭二氏、

③ は 石田蕙一氏撮影）



③



④

◇反射鏡面の蒸着

岡山天体物理観測所 梅雨の候は望遠鏡やドームの手入れの季節である。岡山では6月上旬に鏡面の蒸着作業が行なわれ、また堂平では6月中旬ドームスリットの改修、下旬に反射鏡の蒸着が行なわれた。この頁は岡山の、また次頁は堂平の鏡面蒸着の様子である。

(1) 主鏡のとりはずし。主鏡は昇降床を利用し、鏡皿(ミラーセル)に入れたまま、台車で床面におろす。上部の三本の棒はガイドピンである。

(2) 主鏡の洗滌作業。主鏡は1階床の洗滌台上に安置され、苛性ソーダで旧アルミ面をはがした後、重曹、水、アルコール、エーテルでふきあげる。表面に出ている泡には種々の汚物が入っているので注射針でふき出させる。

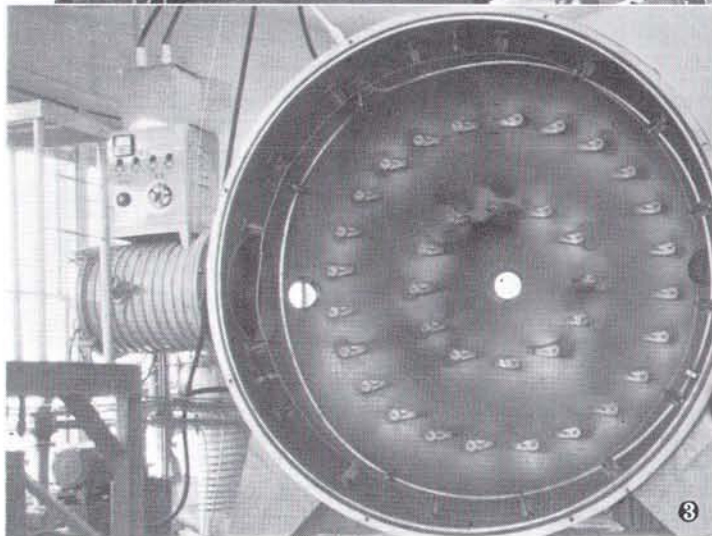
(3) 蒸着用真空タンクの内部。36個の蒸着電極のまわりをとりまく太い円周がマイスナーコイルである。タンクの左方はトランスの下がゲッターポンプ、その下が油拡散ポンプ、その左が回転ポンプと接続している。(タンクはステンレス製、直径2.5メートルである)



1



2



3

堂平観測所の鏡面蒸着

常平観測所の 91 cm 鏡は、1 図の岡山のやり方とはほぼ同じような作業台上で、望遠鏡筒からとりはずし、2 階にあたるドームフロアでセルから取出す。フロアの西端にある円穴から一階蒸着室につり下げ、ここで古いアルミ膜をはがす、白いやわらかい紙で鏡の全面を蔽うようにのせて、その上に苛性カリの水溶液をそそいで 1, 2 分すると 4 のように紙はぼろぼろになり、アルミ膜は溶ける。これを水で洗い流し、重曹、次に水で洗滌し、稀硝酸で中和した後、エーテルで清掃する。5 は真空タンクの内部に蒸着用のアルミを取付けているところ、左側に真空ポンプが見える。きれいになった鏡は、このアルミを取付けたタンクと向い合わせになったタンクの半分に取付けられ、両方を合わせて 10^{-5} mmHg ていどの真空にされる。6 はタンクの半分の内側で、岡山のものとは多少構造がちがっている。右側に 3 箇所見えるひげぜんまいを伸ばしたようなものは、ここにアルミ針金をつるして熱するためのタングステン・フィラメントで全部で 15 個ある。

